



# 若き光

題字：第56代 高麗大記

令和4年2月23日 発行：高麗神社々務所

## 「日高市観光協会の活動」

日高市観光協会 会長

加藤 克美



日高市の観光資源には、巾着田や日和田山、清流高麗川といった豊かな自然と、高麗神社や聖天院、高麗郷古民家などの奥深い歴史を感じられる文化的な財産があります。その中でも巾着田では、春は桜や菜の花、秋には国内最大級の群生地「曼珠沙華」が咲き誇り、毎年大勢の方にご来訪いただき、四季折々の風景や川遊びを楽しんでいただいております。その巾着田周辺の高麗郷一帯には市の観光スポットが集中しており、回遊のしやすさから、市は「遠足の聖地ひだか」として地域ブランドを確立しています。これからの観光戦略としては、それら地域だけでなく市全域を含めた観光ルートの開発やPRが必要だと考えます。



巾着田の曼珠沙華



春の巾着田より望む日和田山

次に、本会の活動を紹介させていただきます。昨年は日高市の市制施行30周年の節目の年となり、市では記念式典が開催されました。本会でもこれを記念し、記念事業実行委員会を立ち上げ、CD「SUN SUN ひだか日和」を作成しました。このCDには、市内の盆踊りなどに使用される「日高音頭」、「日高小唄」の音質を改善したものと、歌詞やメロディを令和版にアレンジした新曲「SUN SUN ひだか日和」が収録されています。「SUN SUN ひだか日和」は会員の皆さまから募集したキーワードをもとに作詞し、日高の自然や歴史が垣間見える歌詞となっています。その他の活動としては、ホームページのリニューアルと、市のマスコットキャラクター「くりっかー・くりっぴー」のキーホルダーの作成を進めております。

今後とも「来てよかった、また行ってみたい」と思っていたいただける魅力ある観光地づくりに努めて参ります。

## 社宝見聞録

### 御帳 みとぼり

#### ―天明大飢饉期の金欄―

御帳（みとぼり）とは、社殿の内部に垂れ下げて、御神前と外界を隔てる布のことです。高麗神社では、年に一度、例祭日のみ、御本殿の内部に金欄の御帳がかけられてきました。写真1は、天明四年（一七八四）に

奉納された従来のものです。表面には、茶色がかった朱色の地に、めでたい文様である稲妻、雲、牡丹が金糸で表現されています。平成二七年（二〇一五）に、従来の御帳をもとに、新たな御帳を復元新調しました。復元新調にあたり調査したところ、直径三〇センチ程の菊紋装飾が二箇所施されていたとわかりました。



写真2 御帳（天明4年奉納）裏面



写真1 御帳（天明4年奉納）表面

この菊紋は、江戸時代の別当大宮寺の本山である聖護院門跡に由来するものです。天明四年に御帳を奉納した「栗坪村 賀右衛門」については、御帳裏面（写真2）の墨書のほか、手がかりがなく、詳細は不明でした。令和三年に別件の史料調査の過程で、「賀右衛門」の九代後の

御子孫が健在で、「岡村」姓と判明しました。天明大飢饉の頃に、どのような経緯で奉納されたのか、今後も調査を続けていきたいと思っております。

例祭にお参りされた際には、ぜひ、復元新調された御帳も御覧になって下さい。

（横田稔 高麗神社主任学芸員）

# 神社さんさく

## 《加倉井秋を句碑》

ひきし  
引獅子や 昏れをうながす 笛と風

昭和四十九年作、当社例祭（十月十九日）に獅子舞を見て詠まれた句である。江戸時代より氏子中が受け継いできた獅子舞は、現在、概ね午後一時から約三時間半にわたり奉納される。別名「ししつくるい」と言われるほど勇壮な舞振りである。一方で笛の音は単調でせつない響きが特徴だ。句に詠まれた「引獅子」は、最後の庭「竿掛かり」の最終盤三頭の獅子が横並びになり、愛でてきた花々から遠ざかりつつ、ひと狂いする。賑々しく行われた秋祭り

も、これで見納めと自ずから郷愁に誘われる場面である。

昭和五十六年十月二十五日、句碑の除幕式が行われた。建立を特に念願したのは高麗冬草会の中心人物 平井素石



引獅子の場面（高麗家住宅前庭）

であった。冬草は俳人加倉井秋が主宰する句会で、その一支部であった「高麗冬草会」には、十六名が集い加倉井に師事して研鑽を積んでいた。加倉井は幾度となく来訪し、高麗の郷を愛でて沢山の作品を生み出したが取り分け高麗神社の獅子舞にすっかり惚れ込んだという。社務所の前で椅子に腰掛け、時間を忘れて見入っていた、と先代宮司の妻 高麗敏江は当時を振り返る。

句碑建立地選定にあたり「当社に」と誘地したのは、加倉井と親交が深かった宮司の高麗澄雄（当時）であった。句は加倉井自らが選定し、原寸大に揮毫した。その原書は、平井素石が大切に保管をしていたが、このたび嗣子 平井 齊氏より当社へご奉納いただいた。原書は、氏のご厚意により綺麗に表装され、

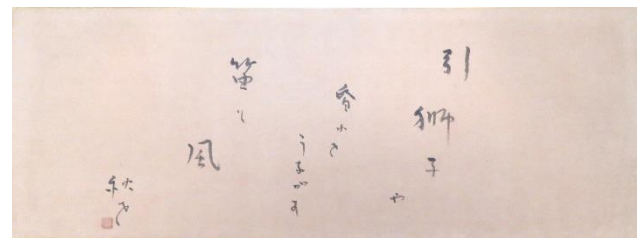


左：加倉井秋を・右：平井素石 / 句碑



令和三年四月十四日、御神前にて奉納奉告祭が執り行われた。

句碑は参道山側に建ち、俳人加倉井秋をの句心をいつまでも伝え続けている。約三時間半に渡る獅子舞だが、最後まで楽しめる伝統行事である。ぜひ十月十九日には例祭に足を運んでいただき、引獅子まで味わっていただきたい。



加倉井 秋を 揮毫の俳句「引獅子」・句碑の原書

## 《本社 水天宮》

高麗神社

御祭神：安徳天皇（あんとくてんのう）

縁 日：毎月五日・十五日・二十五日

行 事：十月十九日 獅子舞宮参り御印行事

御神徳：安産・子育て・無病息災・水難除け

※十二月二十五日 頒布納祭／二月五日 頒布始祭を水天宮御神前にて齋行。十二月二十六日～二月四日の間は、授与品頒布休止となります。



山頂の水天宮は、江戸時代に水天宮の御分霊を勧請したものと伝えられています。広く水に関わる御神徳があり、水が汚れを洗い流し生命を育むことから、安産・子育て・無病息災・水難除けに靈驗あらたかと言われます。

高麗神社の例祭では、高麗神社社殿に続き水天宮でも獅子舞が奉納されます。こうしたことから水天宮の鎮座地は、古くから重要な拜所であったと考えられています。



山頂の静かな空間に鎮座する水天宮



山登りが困難な場合には麓の遥拝所よりお参りください。



## 獅子舞宮参り 御印行事

おしるし

日時・例祭の日 十月十九日 午後二時すぎ  
事前申込み不要 当日参加 / 参加費・無料  
※齋行の一、二カ月前に神社掲示板やホームページなどに詳細な案内が出ます。

江戸時代より氏子中が、賑々と伝えてきた獅子舞。中でも、主に未成年の若者が獅子に扮する『宮参り』は、本殿から山上の水天宮へ登り、日頃の感謝と御神威発揚の願いを込めた舞が奉納されます。

この時、共に登頂した七歳までの子どもたちへ獅子の役者たちが御印をお授けいたします。この御印を額に授けられた者は、高麗神社と水天宮の神様のご加護を受け、一年間『無病息災』の靈驗を授かるといわれています。

## 水天宮授与品案内

水天宮御朱印 五百円  
専用の紙にてお授けいたします。



※御朱印は通年で授与しております。

※縁日のみ授与（毎月五日・十五日・二十五日）  
十二月二十六日～二月四日の間は、授与品頒布休止となります。  
洗心紙 一〇〇円  
文字をなぞり、水に溶かして心身を洗い清めます



水天宮 御守 七〇〇円



水天宮 鈴守 七〇〇円



当地を訪れた人々

# 渋沢篤太夫と渋沢成一郎

高麗神社宮司 高麗文康

渋沢栄一は言わずと知れた埼玉の偉人である。その栄一は縁あって一橋家に仕え、名を篤太夫とした時期があった。江戸時代末期、篤太夫は共に仕官した従兄の成一郎と共に一橋領内を巡り募兵を行った。篤太夫らが仕える一橋家は御三卿と言われる将軍家の藩屏で、高い家格を誇るものの家産は将軍家に依存するところが多く、特に手勢は無いに等しい。それにも拘らず当主一橋慶喜は文久四年（一八六四）三月禁裏御守衛総督に任ぜられたことで京の治安を守る主翼を担うことになった。このような事情もあり、篤太夫と成一郎の両人は領内から武芸心得のある若者を兵士として募る命を受けたのである。

『旧高旧領取調帳 関東編』（近藤出版社）によれば、明治初年前後の現日高市内の一橋領は概ね、梅原村、栗坪村、清流村、高岡村、高岡新田、新堀村、平沢村上組、同中組、同下組、田波目村、横手村であった。

筆者の高祖父（五代前）高麗大記の日記『桜陰筆記』によれば、文久四年六月二日村内の寄り合いがあり「御領地之内外共武術心掛候者之取調として、御役人



渋沢 篤太夫（栄一）  
渋沢史料館所蔵

と評した。五十二年に及ぶ日記の中で、大記がここまで絶賛した人物は居ない。まして相手方は、今や武士とは言え一回り以上年下の二十代半ばの若者達であった。

二週間後の同月十九日、成一郎が改めて梅原へ滞在した。この間大記は方々へ「英士」募集の相談をしたがこの時点では具体的な人選に至っていない。翌七月三十日篤太夫は新堀村名主井上順造宅に滞留、翌日早速英士募集に応じた二名に面会したが、この二名は家族と相談の上、後刻断わりを申し出た。大記はそれを京の動向が不穏だからだろう、と推測している。

翌二日篤太夫は、梅原の甲源一刀流比留間道場へ赴き、一橋家剣術教授方肝煎比留間良八の弟国造と試合をした。この日、大記は早朝から比留間道場を訪れた。篤太夫は仕官前から故郷血洗島で剣術を修め、江戸遊学でも北辰一刀流千葉道場で稽古をした。大記にも多少の心得はあったのだろう。「渋沢氏与一面手合願候事」と、自ら手合わせを申し込んでいる。

ところで、肝心の「英士」募集の件は、比留間道場の門人小川椋太が推挙された。結局、この時、当地から一橋の兵士となったのは、小川一人であった。この間の様子



上：桜陰筆記  
大記が五十二年間にわたり認めた日記  
右：五十六代当主高麗大記



出張廻村ニ付而之事也」

（原文ママ、以下同）と、一橋公の命により役人が派遣され、武術心得があるものを取り調べる旨が通知された。その十二日後、特命を帯びて当地にやってきたのが表題の渋沢篤太夫、渋沢成一郎の両人であった。

大記はその時の模様を前掲書同年六月十四日に次のように著している。

（前略）夜中組頭常八来る、用向は此度御屋形より御出役渋沢成一郎同篤太夫殿来る、当十三日梅原久太郎宅着二而、赤心報国之者を御撰之御用也、然る処拙僧（大記）併二吹上修道二逢度旨被申候由二而参る 十五日晴、朝常八来り、同道御役人旅宿江参る、篤太夫号ハ青洲、詩稿ヲ出して被示、随分之文学士也、手跡も見事之事（中略）此両士天朝家也、去年御上京之節御屋形江入、御共二而此度京都御用ヲ蒙り下り廻村也、面話至而丁寧之人也、談話及数刻帰る、但し英士募方被頼候事」（カッコ書きは筆者）

十三日梅原村久太郎宅に着いた両人は早速、募兵に付き村々の面立ちに相談を始めたらしく、大記は医師 新修道と共に十五日に面会をした。面談は自己紹介から始まったのだろう、篤太夫は自作の漢詩を見せ評を乞うた。大記は「随分之文学士」「手跡も見事」とし、更に数時間話し込んで、両人を「天朝家」「尊王家」「丁寧之人」

を大記は「（前略）当九ヶ村談合二而申立 小川壱人二而十人ニも勝り可申談内々申上候処、渋沢氏承知也」と記している。大記にとつて小川椋太は初見だったのだろう「目見いたし候、随分英士なり」と印象を述べており、六日夜には再び梅原比留間を訪ね、翌朝出立する小川に面会している。

一橋家に仕官した小川椋太は、後に彰義隊の一員として上野戦争に参加した。興郷と改名し、明治七年（一八七四）、彰義隊士が火葬された地に墓所を営んだ。明治政府への出仕を拒み、貧にあえぎながらも墓所を整え続け、生涯を墓守に捧げた。子孫もまた、興郷の志を受け継ぎ墓所を守り続けている。

著作物や家伝から推測するに、大記という人物は思慮深くてやすく時勢に流されたり、相手方の立場におもねることはしない。その大記をして感嘆せしめた渋沢篤太夫、成一郎は二十代半ばにして既に大器の片鱗を見せていたのだろう。

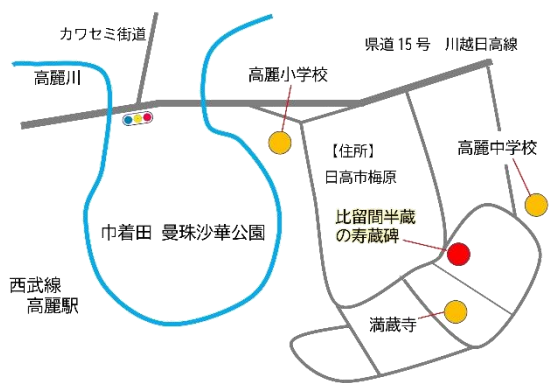
## 《史跡紹介》 甲源一刀流 比留間道場ゆかりの碑 比留間半蔵の寿蔵碑

幕末三代にわたり剣道の達人を輩出した比留間家の二代半蔵利充の徳を讃え、

その門人たちにより明治十六年に建立された寿碑。



参照  
日高町史 文化財編



渋沢 成一郎（喜作）  
渋沢史料館所蔵

# 神社まめ知識

## 「喪に服す」について

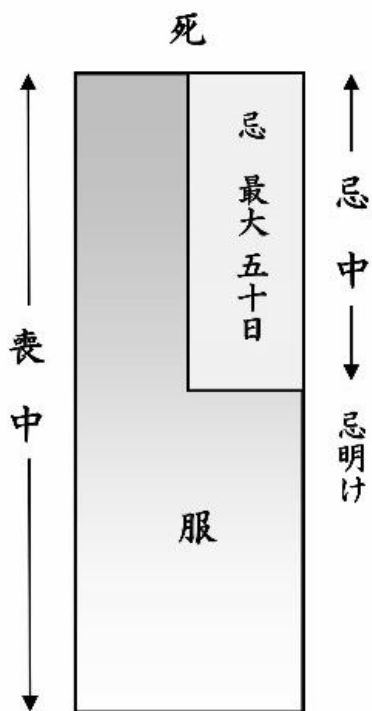
穢れは、一説に「氣(霊)が枯れ」を意味し、これが身に付くことは生命力を脅かすと、忌み嫌われてきました。この穢れに侵された究極の状態が「死」ということになります。故に古来より日本人は、この穢れのない状態、「清浄」を心掛け生活してきました。しかし、時に死は身近なものとして訪れ、大きな悲しみや日常生活の混乱をもたらします。その為、故人の御霊が安らげるよう慰霊に専念し、更に縁ある人達に穢れや混乱が伝播しないよう、行動を慎む期間を過ごす風習が生まれました。これを「喪に服す」と言い、この期間には「忌」と「服」の二通りが内在しております。

「忌」は、故人の死を悼み、御霊をなぐさめる期間で、その状態を「忌中」といいます。「忌中」に当たるのは、故人の家族や親族で、神道ではその期間を最大五十日としています。(仏教では四十九日)自らの親や子、配偶者の場合、忌中は五十日が基本で、兄弟、姉妹、叔父叔母等血縁が遠くなると短くなります。故人と同居していたかどうか、葬儀の喪主の家かどうかでも忌中の期間は変わります。忌中の者は、地域の祭礼行事・神社への参拝を

遠慮し家の神棚の前に白紙を貼り、神事奉仕を一旦休止しなければなりません。生活においてもお祝い事の子定を、忌明け後に延期するなどの配慮が必要となります。

「服」は、古来、喪服を着て過ごす事でその期間を「喪中」とも言いました。これは故人への哀悼を表す事を意味しています。「喪中」は一般的に、百日から一年が目安ですが、親族の心情に左右される為、一律ではありません。忌が明けたとは言え、普段の生活に戻るためには今しばらく猶予が必要です。「心のけじめ」をつける期間と考えて良いかもしれません。

地域の慣例によって「忌」「服」の風習が異なる場合もあります。また、特別な事情により忌中でもお祝い事や神事に関わらざるを得ない場合には、祓いを行い一時的に忌明けとする例もあります。お近くの神主にご相談ください。



## 新嘗祭

毎年 十一月二十三日 午前九時 高麗神社 御本殿にて斎行

毎年十一月二十三日には、天皇陛下がその年の新穀を神々に御神供なされる新嘗祭が、皇居・神嘉殿において行われます。これに倣い全国各地の神社においても新嘗祭が執り行われます。五穀豊穡を神々へ奉告し、感謝する祭事です。  
 ※当社では、どなたでもご参列いただけます。参列に際しての詳細情報は、斎行の一、二か月前に神社公式ホームページに掲載いたします。

## 新嘗祭 懸税・作物の奉納ご案内

### ○新米の稲穂の束(懸税)をご奉納ください

※奉納の受付は、稲の収穫時期となる九月頃より開始いたします。懸税とは、稲穂の稲を神域の垣にかけて神に献ずる事を言います。「ちから」とは租税(そせい)もしくは貢物(みつぎもの)の意味で、丹精込めて作ったお米(稲穂)を尊い神へと供え、秋の実りに感謝を申し上げます。  
 ご奉納いただきました懸税(新米の稲穂)は、新嘗祭の一週間前より当日まで、社殿前にてお供えさせていただきます。

### ○収穫した作物をご奉納ください

新嘗祭に際して、お米の他、丹精込めて作った作物のご奉納も受け付けております。  
 なお、長期的な保存が難しい作物は、十一月二十三日の当日、もしくは二日〜三日前にご奉納ください。当日お持ちいただきましたものは、順次お供えをさせていただきます。



## 編集後記

担当・保々

昨年、東京オリンピックが開催されました。感染症と戦う中での実施。選手やスタッフの苦労は、計り知れないものであったことでしょう。困難を越え、大舞台に立つ選手達の姿は、凛とし輝いていた事を思い出します。時は遡り、激動の時代に生きた洪沢栄一、洪沢喜作が当地域にも来訪していました。身近な所での偉人の足跡に、大変うれしくなりました。若き日の凛々しい御姿からも困難に立ち向かう、意志の強さが感じられます。

祈願随時受付 毎日8:30~17:00 (12/31は、14:00まで)

※ご予約の必要はありません。

初宮詣・七五三・ランドセルのお祓い(3月上旬~4月上旬)

人生儀礼各種・商売繁昌・厄除け・方位除け・車お祓い

高麗神社々務所 埼玉県日高市新堀 833 ☎042-989-1403

